

畿内における在地寺院の様相

網 伸 也

要旨 近年古代寺院の発掘調査は、中心伽藍の遺構だけでなく寺院経営に関わる付属雑舎の調査も視野に入れた調査が行われている。畿内周辺部でも寺院地の調査例が増加し、在地寺院の様相が次第に明らかになりつつある。ここでは北山背や近江・河内などの代表的な在地寺院の調査成果を概観し、中心伽藍の造営過程だけでなく寺院経営を支えた空間がどのような存在形態であったかを検討してみた。その結果、在地寺院の造営はあくまで伽藍の造営に主眼がおかれ、寺院経営に伴う施設は創建当初には設けられていないことが判明した。また、伽藍の造営は常に景観を意識して行なわれており、伽藍配置は定型化した伽藍設計よりもこの景観に規制されることが多い事実も指摘できた。寺院のなかに伽藍地と寺院地の明確な区別がなされ、寺院経営に伴う付属雑舎が整備されるようになるのは、集里計画に基づく寺院地の成立が認められる奈良時代のことである。ここでは、8世紀の寺院統制のなかで寺院地を確保し、付属雑舎などの整備によって寺院経営を行なっていくとする在地寺院の姿を読みとることができるのである。

1. はじめに

古代寺院のイメージとしてまず我々が思い浮かぶのは、天高くそびえ立つ層塔や金色の仏像を安置した金堂あるいは講堂が規則的に配置された伽藍であろう。古代政権の中心地である大和では、飛鳥寺をはじめ七堂伽藍を備えた寺院が多く建立されていたことが考古学的にも明らかになっている。これらの古代寺院における規則的な伽藍配置の意味について上原真人氏は、太田博太郎氏の提起した回廊の閉じ方と講堂との位置関係による型式分類¹⁾を発展させ、回廊が仏地（金堂・塔を主体とする空間）と僧地（講堂・僧房を主体とする空間）とを区画し、仏教儀式を行なう空間構造の時期的変遷として認識した²⁾。つまり、飛鳥寺など「回廊が金堂・塔を囲んで」とし、講堂は回廊外にあるもの（B型）は初期寺院に多く、回廊内は仏地として僧・俗人が集結する大規模な仏教儀式は行なわれない型なる空間であったのに対し、7世紀後半に出現する「回廊が金堂にとりつき、講堂は回廊外にあるもの」（A型）では金堂前面に仏教儀式の空間を広く確保するようになるという。

これに対し、山岸常人氏は奈良時代以前の中門は礼仏堂の機能を持っていたと考え、初期寺院の段階から金堂・塔を主体とする仏地内での法会形態の存在を指摘している³⁾。飛鳥寺や山田寺あるいは四天王寺など伽藍を完備した寺院については、山岸氏が指摘するように奈良時代の庭儀法会とは異なる法会形態が回廊内において行なわれていた可能性は充分あろう。上原氏も伽藍配

置の変遷を儀式空間の変化の中に読み取ろうとしたのであり、初期寺院における回廊内での「仏塔をめぐる」何等かの法会形態の存在を示唆している。

問題はむしろ、在地寺院における「僧地」の存在形態である。7世紀段階の在地寺院においては僧房が検出される例が少なく、中心伽藍でも堂塔は検出されるが回廊は確認できない事例も多い。上原氏も指摘しているように「僧地」に対応する空間が存在しない寺院が多く認められるのである。また、現在我々が確認できる伽藍配置は、これら在地寺院の最終的な姿であり、造営当初にどのような伽藍を想定していたのか、あるいは果たして一定の規則的な伽藍設計のもとに順次建物が造営されていたのかも再検討する必要がある。

たとえば須田勉氏は遺構に現れた建物構造から寺院を、①基壇を有する瓦葺建物で一定の伽藍をそなえたもの、②基壇建物で堂一字だけのもの、③掘立柱建物で瓦葺であるもの、④簡単な基壇を持つが瓦葺建物でないもの、⑤掘立柱建物のみで構成されるもの、の5段階に分類しており、とくに①②段階の寺院については「仮に小規模であったとしても、どれだけ国家仏教に連なる寺院としての体勢を整えていたか、理念と掛離れた見掛けだけのものではあったか、あるいは、民衆の尊崇を集めていたか、寺の成立段階も含め、もう少し構造的に究明する必要がある」と重要な提言をしている⁽⁴⁾。在地における古代寺院の造営は、既成の伽藍配置に規定されることはむしろ少なく、一堂塔の造営を契機として始められ順次伽藍建物を造営していく例が多いと予測される。つまり、②段階あるいは③④⑤段階として成立した寺院がそのまま在地で維持されることもある一方で、在地における中心的な寺院として新たな伽藍造営が引き続き行なわれ①段階の寺院へと発展し、その結果が一定の伽藍配置として表出されていることも想定できるのである。

さらに、最近の古代寺院研究は、中心伽藍の検討だけでなく寺院経営を支えた空間がどのような存在形態であったかに移りつつある。とくに関東における国分僧尼寺の発掘調査の進展によって、付属諸院のあり方が具体的に検討できるようになった⁽⁵⁾。そして、いままで曖昧にされていた寺院の占有空間に対して、寺院の中心建物群の空間を「伽藍地」、寺院経営に関わる諸施設の空間を「付属院地」とし、これらを合わせた敷地全体の空間を「寺院地」と明確に規定されたのである⁽⁶⁾。これらの考古学的成果を受けて、畿内の古代寺院についても「伽藍地」と「付属院地」の存在形態が再検討されるようになり、『額田寺伽藍並条里図』に描かれた奈良時代の額田寺伽藍と付属院地の分析も進められている⁽⁷⁾。

ここでは以上の研究史を踏まえ、在地の古代寺院において伽藍地と付属院地がどのような関係にあったのか、あるいは寺院地としての成立がどのような過程でなされていったのかという問題について、まず北山背の古代寺院の発掘調査成果を検討し、畿内周辺地域の在地寺院の存在形態について考察を加えていきたい。

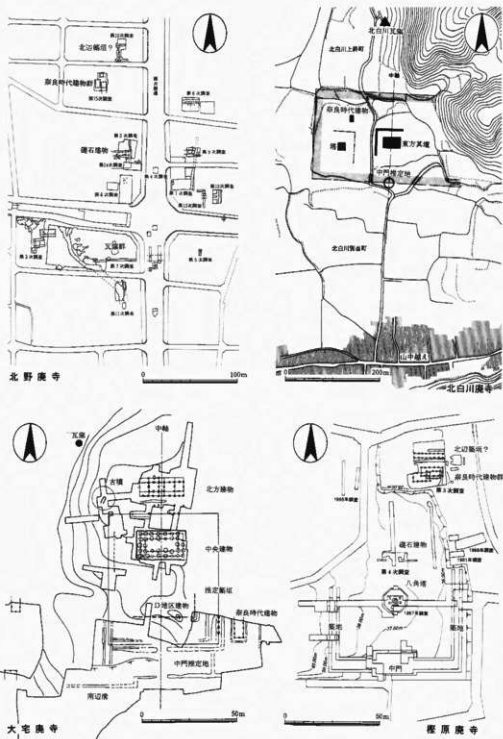
2. 北山背における古代寺院の伽藍地と付属院地

(1) 北野廃寺

伽藍地 山城盆地の最古の寺院である北野廃寺では瓦積み基壇建物の東半とそれに取り付く廻廊基壇の一部を検出している。建物はA期とB期の2時期あり、いずれも火災痕跡が認められる。A期建物は瓦葺き、B期建物は檜皮葺きで、A期建物焼失後の整地層からは平安時代前期までの瓦しか出土しないことから9世紀段階で焼失し檜皮葺き建物に立て替えられたと推測できる。また、A期建物には回廊が取り付くことから中心伽藍の一部と考えられ、基壇造営のための土取り穴から出土した土器の型式から奈良時代前期の建立と考えられている。北野廃寺からは「野寺」銘の墨書土器が出土しており、この瓦積基壇建物は野寺の講堂と推定されている。しかし、焼失したときには野寺の伽藍建物であったとしても野寺の講堂として造営されたかどうかは疑問である。瓦積基壇には白鳳期の平瓦を使用されており、瓦積基壇の成立が百済系渡来人との関係から一般的に7世紀後半に成立したと考えられていることから、この堂舎も7世紀後半から8世紀にかけて建立され、野寺として整備された時に補修を受けたものと考えられる⁸⁾。遺跡の遺存状況が悪くその他の伽藍については全く不明であるが、A期建物の焼失に相当する『日本三代実録』元慶8年3月15日条には「夜大雷雨。震常住寺塔。火自第五層起。延焼講堂。金堂。鐘樓。経藏。歩廊。中門。」とある。野寺が七堂伽藍を備えていたことは明らかで、中門から歩廊がめぐり金堂あるいは講堂に取り付くのであれば、やはり中軸線上に堂舎を配置する伽藍を復元することも可能である。塔は当時の一般的な伽藍配置から歩廊外に建立されていたと考えられるが、平安遷都以前から建立されていたかどうかは明らかでない。

寺院地・付属院地 寺院地の推定は、中心伽藍の北方・東方・南方の発掘調査で溝などを検出しており、寺院地を区画する施設との関連が指摘されている。ただ、これらの溝が穿かれた時期に問題があり、創建当初から寺院地が成立していたとは考えられない。ここでは寺院地北限の第10次・第15次調査で検出した遺構群について、奈良時代以前の遺構の時期的な変遷を考えてみたい⁹⁾。奈良時代以前の遺構は、7世紀後半段階で堅穴住居が営まれている。瓦片が出土する堅穴住居跡を4棟検出しており、この時期には寺院地の北限は確定されていないようである。ただ、北野廃寺が7世紀前半に建立されており、その伽藍地の北方に隣接するこれらの堅穴住居群が、一般集落として営まれたとは考えがたい。地方寺院において、伽藍地の周辺に寺院に関連する堅穴住居群が営まれる類例は各地で認められ、北野廃寺も例外ではないであろう。寺院と密接に関係する人々が生活を営んだ場として伽藍地周辺が利用されていた状況を知ることができる。8世紀にはいると、第10次調査では寺院地北限と考えられている東西溝が成立し、第15次調査では寺院地北辺に営まれた付属雑舎に關係する建物を検出している。これらの経営施設がいかなる性格をもっていたかは明らかでないが、今後の調査において付属雑舎群の建物配置を明らかにしてい

畿内における在地寺院の様相（網 伸也）



第1図 北山背古代寺院の伽藍地と寺院地

く必要があろう。北野座寺では寺院地南西に創建期から操業する瓦窯群が営まれており、8世紀前半にはここで興福寺式軒瓦を多量に焼成している。これらの事実から、8世紀前半段階に伽藍整備に関係する大きな画期が想定できる。8世紀における寺院地の確定や付属雑舎の整備は、興福寺式軒瓦の生産に伴う画期に対応しており、寺院経営が全体的に整備されたことを示唆している。

(2) 広隆寺

伽藍地 広隆寺旧域の発掘調査は現境内地周辺で数回にわたって行われているが、創建期に遡る明確な伽藍遺構は検出できていない。ただ、現存講堂の西方、右京区役所本館部分で大正年間に塔心礎が発見されているが、この発見地の北側で7世紀後半の基壇地業痕跡を検出しており⁹⁹、この基壇は塔院を形成する廻廊基壇と考えられている。なお、この調査では7世紀後半と考えられる瓦溜りを検出し、そこには奈良時代前期の軒瓦20点が含まれるとのことで、塔の造営が7世紀後半段階で行われた可能性を示唆している。おそらく、伽藍の本格的整備がこのころ行われたことは間違いないであろう。広隆寺の伽藍については不明な点が多いが、現境内に残る講堂を創建当初の元位置と推定し、法隆寺式あるいは法起寺式伽藍配置が想定されていた。しかし、『実録帳』などの記載から中門・金堂・講堂が一直線に並ぶ伽藍も推定されている。これらの史料は9世紀後半に成立したものであるが、『日本紀略』によれば広隆寺は弘仁9年4月に被災しており、ここに記された伽藍は被災後のものとなる。しかし、堂塔を再建するときには当初の伽藍を踏襲して建立されるのが自然であるから、被災以前の姿をある程度示していると考えられる。『実録帳』では中心伽藍には塔がなく、仏物章に中門から歩廊がめぐり金堂にとりつく伽藍が示されており、法物章の項に「講法堂」がみえる。塔院は別院として記載されているが、その位置は塔心礎の出土地から中心伽藍の西に想定でき、塔院には塔だけでなく「檜皮葺参間堂」や「板葺五間僧坊」があったことも記載されている。つまり、広隆寺の伽藍は東に金堂院、西に堂を伴う塔院が並存していたことになる¹⁰⁰。

寺院地・付属院地 昭和45年にバイパス工事に先立つ発掘調査が平安博物館によって行われ、南大門と講堂の主軸より東へ500尺(150m)の地点で、平安時代の広隆寺の東築地を検出して¹⁰¹いる。この調査結果では、寺域南限の施設こそ確認できなかったが東築地を検出し、『実録帳』に記された寺域東限に推定できる。南大門の位置が創建当初から変わらないならば、寺院地の南限と東限は古地図によれば葛野郡の条里遺構と合致し、『承和縁起』に記載されている五条荒葺里の寺院推定地(東西3町、南北2町)に重なることが可能である。ただ、東限築地が平安時代のものであり、下層には奈良時代以前の東西溝が確認されているとのことで、この推定寺域が創建段階まで遡るとは断定はできない。また、この復原によれば現在の霊宝館が寺院地北限にあたるが、昭和55年の発掘調査では北限の施設は検出できず、瓦を包含する堅穴住居を4棟検出して¹⁰²いる。東築地下層に奈良時代以前の東西溝が存在することも考慮すれば、葛野郡条里に規制され

た寺院地の成立は少なくとも8世紀にはいつてからであることがわかる。

（3）北白川廃寺

伽藍地 昭和9年の京都府史蹟勝地調査会が行った調査で、瓦積基壇（東方基壇）を検出したことから明らかとなった古代寺院である。礎石の握え付け痕跡は明らかではないが、基壇は東西35.7m、南北22.7mの大規模なもので、南北辺の中央に石階を設けていた。また、昭和49年には東方基壇の西約80mの地点で瓦積基壇から乱石積基壇に改修された塔跡を検出した。基壇上の礎石や根石はすべて失われていたが、中央部に心柱の痕跡と考えられる直径3mの落ち込みを確認した。その後は、昭和55年度に東方基壇の西南部を確認するとともにその西側で新たに南北方向の基壇を検出した（西方基壇）。基壇上には礎石が3箇所に残存しており、東西1間（柱間3.8m）、南北7間以上（柱間3.2m）の回廊と考えている。なお、広域下水工事に伴う立会調査で、東方基壇の北16.5mの地点でも版築基壇の北辺を検出した。東方基壇との位置的な関係から建物とするには幅が狭く、北回廊の基壇と考えられる。平成2年度には西方基壇の西隣の約1m段丘を下がった地点の調査を行い、幅約3mの南北溝を検出した。東方基壇を中心とした一院はこの段丘上に建立されているようで、南北溝は段丘の縁に建てられた西回廊を下がったところに位置する。また、塔跡のすぐ北側でも雨落ち溝を伴う東西築垣を検出おり、とくに南側の溝からは塔で使用されたと考えられる瓦が多量に出土していることから、これらの築垣は塔の北側を区切る施設の可能性が高い。ただ、この築垣は側溝から出土した土器群から、創建段階より時期が下がり、奈良時代後半の再整備に関わるものと考えられる。これら一連の調査成果から、北白川廃寺の伽藍配置は、一段高い台地上に東方基壇を回廊で囲む院があり、その西のやや下がったところに塔を中心とする院が並んでいたと考えている²⁶。

寺院地・付属院地 伝聞ではあるが、東方基壇の南に門跡が存在したとのことである。この推定門跡付近では立会調査で東西溝を検出しており、この東約90mの地点でも東西溝を検出している。これらの溝が門跡につながるのであれば、寺域の南辺を区切る溝である可能性が高い。また、塔跡の西方でも立会調査で瓦の包含層が広く確認されており、寺院地の広がりも推定させる。ここで、大正11年の都市計画図に近年の発掘調査成果を落としてみると、山中越の街道筋から推定門跡に延びる古道が認められる。この道を南北方向の軸に見立てた場合、東方基壇のほぼ中心に軸が通っており、東方基壇を中心建物と考える先の考察を裏付けている。また寺院地の四至であるが、遺構としては寺院地南限しか推測できない。ただ、西限については南北軸門推定地から約165mの位置で地割がL字状に曲がって北に延びており、この地割ラインを寺院地西限に考えることができる。東限は自然地形によるが、南北西限を方形に区画した寺院地を想定でき、愛宕郡の条里区画に基づく南北2坪、東西3坪ほどの占地が推測できる。寺院地内の付属建物としては、塔院の北で奈良時代の掘立柱建物を検出している。なお、推定寺院地の南方に位置する小倉町別当町遺跡で、7世紀後半に営まれた多くの竪穴住居跡を検出している。この竪穴住居群

の周辺からは瓦類だけでなく、瓦塔・唐三彩・無文銀銭などの特種な遺物が出土しており、北白川廃寺と何らかの関係をもった集落であると考えられる³⁵。

(4) 大宅廃寺

伽藍地 大宅廃寺の発掘調査は昭和33年に行われ、乱石積み基壇を持つ礎石建物（中央建物）とその北方に中軸を揃えた礎石建物（北方建物）を検出しており、中央建物の南方にも基壇の痕跡を2箇所で見出している。その後、昭和60年に礎石建物の南方の調査を行い、昭和33年に一部確認した南方基壇のうち北建物の雨落ち溝を確認するとともに、中心伽藍を囲むと考えられる二重の溝を見出した。この溝の間には築垣が存在したと考えられ、その痕跡が東側で一部残っていた。また、南面中央の伽藍中軸線部分では溝が途切れており、中門が存在したと推定できる。これは昭和33年の南方基壇南建物と位置的にはほぼ合致している。私見によれば、昭和33年度検出の北方建物は中軸柱間の東西にそれぞれ2単位の二間房を配した僧房と想定しており、その前面で主要伽藍の北築垣が閉じる構造を考えている。また、礎石採取穴の検出状況から中央建物の基壇の高さがかなり低く金堂よりも講堂に適していることや、北方建物の特種な建物構造から、中央建物を講堂としてその南に金堂・中門が一直線上に並んでいたと考えられる。これらを総合すると、金堂と講堂を南北に並列させるが、中門から派生する築垣は建物に取り付くのではなく講堂の後方で中心建物を閉鎖し、その北側に僧房を配する伽藍が想定される³⁶。

寺院地・付属院地 寺院地を区画する遺構はまだ検出されていないが、昭和60年度調査での伽藍西方調査区の所見が興味をひく³⁷。伽藍が形成された台地から西の傾斜面で古墳時代から飛鳥時代にかけての堅穴住居が多く検出されており、古墳時代住居は一部が伽藍溝と重なっているが飛鳥時代住居は西側斜面だけに検出されている。住居から出土する遺物は少量ながら須恵器の編年では7世紀中頃とのことで、現状では寺院の造営に先行すると考えてられているが、住居群が寺院創建当初まで下がる可能性もある。寺院創建後も小規模な掘立柱建物が伽藍区画溝の周囲に建てられているが、少なくとも創建段階では寺院地を区画する施設はなかったと考えられる。ところが、8世紀後半段階以降になると、伽藍区画の南溝から南へ15m～20mの地点で東西溝が掘削されるようになる。また、東築垣の東では雨落ち溝に囲まれた南北棟掘立柱建物が建てられるなど、寺院地の整備が行われている。ここで注意すべきことは付属雑舎の整備が、伽藍地の東側を中心に行なわれていることである。大宅廃寺は高塚山とその北に連なる行者ヶ森の西麓の扇状台地上に位置する古代寺院であり、伽藍地西側を下がったところに現在の奈良街道がはしっている。この道は大和から近江へ抜ける幹線路として、古代から利用されてきたと考えられることから、伽藍地の建立あるいは寺院地の整備は常に古道からの景観を重視して行なわれたことが推測できるのである。

（5）櫻原廃寺

伽藍地 櫻原廃寺は昭和42年の調査でその存在が明らかとなった古代寺院である。平面八角形の瓦積基壇が良好に遺存しており、基壇中央には上面より2mあまりの深さで礎石が据えられていたことから、この特殊な建物は地下式心礎を持つ塔であることが判明した。基壇の規模は一辺5.07m、対辺距離12.27mで、高さ1.17m遺存しており、北辺は不明だが南辺には階段が設けられていた。また、塔の南には中門と推定される建物基壇を検出している。東西約20m、南北11mで、基壇の西には回廊と推定される幅約5mの基壇痕跡が確認された。塔基壇の東西では築地の存在を示す南北溝を検出しており、塔基壇の北側にも基壇状の高まりが認められることから、塔と金堂が南北に並ぶ伽藍配置が想定されていた³⁸。ところが、平成9年に金堂推定地の発掘調査を行なったところ、塔基壇の北方約20mの地点で東西14.3m、南辺は確定していないが南北10mほどの小さな建物基壇を検出するにとどまった³⁹。基壇化粧は長辺0.2～0.3mほどの石を1条並べた部分を検出しただけで詳細は不明である。周辺から出土する瓦類は瓦葺建物としては極端に少なく、しかも平瓦がほとんどで現状では瓦葺建物でない可能性が高い。さらに、建物基壇には回廊などが取り付く痕跡が認められず、東西幅が推定中門基壇よりも小さいことから伽藍の中心建物としての金堂とは想定しがたい。トレンチ調査ではこの建物の北側には基壇はまったく検出できず、塔を中心として建物が南北に配される特殊な伽藍配置を想定せざるをえない。伽藍地の東から南については地形が急激に下がっており、東にはしる物集女街道からの眺望を重視したかたちで、塔を中心とした伽藍が建立されたと考えられるのである。

寺院地・付属院地 金堂推定地の調査に先行して寺院地北限の発掘調査を行っており、平行する2列の掘立柱列と雨落ち溝を検出している⁴⁰。概報ではこの遺構を掘立柱の回廊と想定している。しかし、掘立柱の柱位置が微妙にずれていることや、この南にすくなくとも3時期の建て替えが認められる掘立柱建物が存在すること、あるいは検出地点が中心伽藍よりも標高で2～3mも下がった場所であることなどから、私見では中心伽藍を区画する北回廊とは考えていない。むしろ、寺院地の北側を区画する横列を考えるほうが自然であろう。このように考えることによって、頻繁に立て替えられている掘立柱建物を寺院付属雑舎の一部として想定することが可能となろう⁴¹。ただ、これらの付属雑舎群と塔基壇の北建物の間には閉鎖施設が認められず、塔を中心とした伽藍地とは空間地を設けることによって意識的に区画していたのかもしれない。推定雨落ち溝から出土する土器群は8世紀後半から9世紀前半の様相をみせており、これらの施設が創建期まで溯る可能性は低く、塔の北で検出した小建物とともに8世紀後半における寺院の整備を示すものではなかろうか。

以上、北山背の古代寺院の伽藍地と寺院地の様相を概観してみた。このうち北野廃寺・広隆寺が7世紀前半に遡るが、他の寺院は7世紀後半の創建となる。これらの寺院の堂塔は地域に根ざした氏族の援助のもとに順次建立されていくようであるが、その造営はあくまで伽藍地の造営に

主眼がおかれ、寺院経営に伴う施設は設けられていない。これは、在地において寺院を建立する意味が、政治的には地域における権威の象徴としてであり、精神的には造営・造仏自体が氏族の祖先追善供養として認識されていたため、法会などの定期的な仏教儀式を意識したものではなかったためと推測できる。先に述べたように、上原氏が指摘する「たとえ講堂をそなえていても、僧地と称すべき空間自体は存在しない寺院」¹²⁾が在地で多く存在するのは、このような在地における寺院の性格によるものと考えられよう。寺院のなかに伽藍地と寺院地の明確な区別がなされ、寺院経営に伴う付属雑舎が整備されるようになるのは、創建期よりも遅れた奈良時代のことであったと推測できるのである。

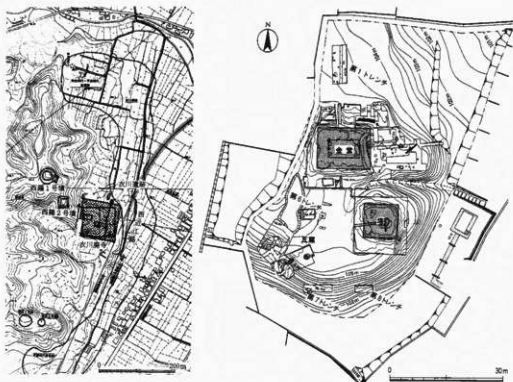
また、伽藍の造営が常に古道からの景観を意識して行なわれており、伽藍配置もこの景観に規制されることも指摘できよう¹³⁾。大宅廃寺や豊原廃寺では前述したように明らかに幹線路からの伽藍の景観が意識されており、北白川廃寺も金堂院と塔院が東西に並ぶ伽藍は東西路である山中越からの眺望を意識した結果と考えられる。これらのことは、想定復原した広隆寺の伽藍にもあてはまるであろう。在地寺院では定型化した伽藍配置を指向して造営が行なわれるよりも、伽藍の立地あるいは景観によって伽藍配置が決定される要素が少なくなかったと思われる。次章では山背以外の畿内周辺地域での事例を概観することによって、在地寺院の実態をさらに明らかにしていきたい。

3. 在地寺院の構造(1)

山背との関係で注目できるのが、近江の在地寺院の様相である。ここでは在地寺院の造営過程を知るうえで非常に参考となる、衣川廃寺と雪野寺・宮井廃寺の様相をはじめに概観してみたい。いずれも7世紀後半に創建されたと考えられる古代寺院である。

衣川廃寺は天津市の北方、琵琶湖に向かって張り出す志賀丘陵の先端に造営された古代寺院である。昭和50年度に発掘調査が行なわれ、金堂・塔の基壇とともに瓦窯跡が確認された¹⁴⁾。さらに、保存整備事業に伴う発掘調査が平成6年度より6年間行なわれ、伽藍の様相がかなり明らかにされた¹⁵⁾。これらの調査成果によると、伽藍建物としては金堂がまず建立され、遅れて塔の造営が行なわれたことが判明した。とくに昭和50年度調査の所見では、塔基壇版築上層からは創建段階の軒丸瓦(無子葉弁文第1形式=NM01)が出土しており、瓦塔片も出土することから、塔基壇上に瓦塔を安置する建物の存在を示唆している。衣川廃寺で塔が実際に完成していたかについては、後の再発掘における所見から疑問視する意見も提示されているが、伽藍としてふたつの基壇建物しか建てられなかったことは間違いない(第2図)。

創建年代としては、軒丸瓦の検討から7世紀第3四半期に造営が開始され、近江大津宮時代まで造営が続けられたと推定されている¹⁶⁾。ここで重視すべきことは、これらの伽藍造営にあたって定型化した伽藍配置を指向していなかった可能性が高いことである。衣川廃寺の伽藍地は丘陵



第2図 衣川廃寺の立地と伽藍

先端の狭い空間に位置しており、実際金堂の東側から塔基壇の南側まで急激に地形が下がっている。金堂基壇を造成するにあたって、北東方向に下がる傾斜地に位置するため厚い盛り土による整地が行われており、まずは眺望の最もよい場所を選んで仏堂を建立したのが実状と考えられる。そして、金堂の造営が一段落した時点で、金堂前の狭い平地の東端に塔を建立しようとしたのであろう。これらの伽藍は、湖西から越へ抜ける幹線路（西近江路）から最も景観のよい場所に建立されており、古道から望んだ伽藍の背後には帆立貝形古墳を中心とする西羅古墳群が眺望できた。また、伽藍の下には衣川廃寺を取り巻くように奈良時代から平安時代にかけての遺物を包含する衣川遺跡が存在しており²⁰、古代における大きな勢力圏を形成していたことがわかる。

衣川廃寺では金堂・塔の2つの基壇建物以外は確認できていないが、回廊などの伽藍地閉鎖施設は地形的にも存在しなかった可能性が高い。定型化した伽藍配置よりも東からの景観を重視した結果が、衣川廃寺の伽藍構成に表出しているのである。そして、寺院地としては明確な付属雑舎を形成するまでには至らず、おそらく衣川遺跡に想定できる在地勢力圏内に、寺院経営に関わる施設が営まれたものと考えられる。なお、衣川遺跡の掘立柱建物群が衣川廃寺の造営よりも遅れて成立しており、出土遺物からも奈良時代から平安時代にかけて一つのピークが認められるこ

とは、在地寺院の存在形態を知るうえで非常に示唆的である。

次に雪野寺であるが、湖東平野の南部、蒲生郡竜王町に所在する古代寺院である。古くから塋像片が採集されることで知られていたが、昭和9年から10年にかけて日本古文化研究所によって発掘調査され、塔跡の存在が明らかとなった⁹⁸。その後、主要堂宇の確認など寺院の全容を解明するために、1989年から1991年にかけて発掘調査が行われ、塔基壇の北西に礎石建物が2棟存在することが判明した⁹⁹。

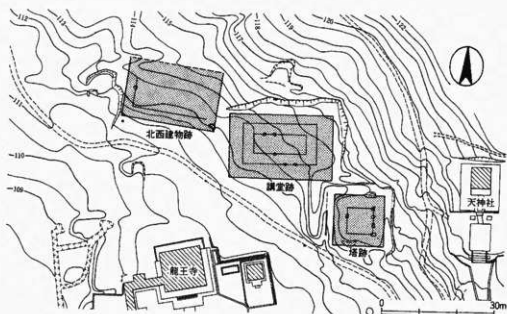
寺院は独立丘陵である雪野山(竜王山)の南端部、北東から南西への傾斜面に造営されており、塔とその北西建物は斜面を鍵状に削り出すことによって平地を造成し基壇を築いている。発掘調査の所見によると、基壇の構築にあたっては地山の削り出しを主体としており、盛り土は低くなる西端部に行なう程度で、強固な版築は施されていないという。また、塔基壇では西面と南面に張り出しの乱石積基壇が構築されているが、これは傾斜面に基壇を造った関係上、低くなる西面と南面に1段の基壇を加える必要があったためとされる。

塔基壇のすぐ北西で検出された建物は、基壇が低く礎石も塔基壇に比べて小さいことや、遺存する礎石と基壇との関係から五間四面の建物に復原されることから、概要報告では講堂と推定されている。また、この建物のさらに北西に接して、同規模の基壇建物を確認しており、「食堂や僧坊といった僧侶の生活に関わる建物」と考えられている。これらの所見から法起寺式伽藍配置が想定されているが、金堂推定地となる竜王寺境内での調査では基壇建物の確認はできなかった。概要報告でも述べられているように、講堂跡を金堂と考えることによって塔と金堂が斜めに並ぶ変則的な伽藍配置も想定できる(第3図)。

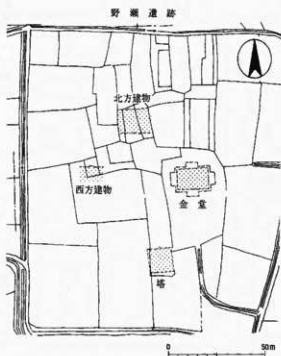
私見としては定型化した伽藍配置を指向したとすれば、あまりに山際に主要堂舎を建立していること、塔跡と講堂跡が接近しすぎており塔の西側の低い場所に金堂を想定するには地形的に不自然であること、回廊の存在が想定できないことなどから、雪野寺も衣川廃寺と同じく主要堂舎として仏堂と塔だけが最初に建立された典型的な在地寺院であったと考えている。五間四面の建物も山背地域で検討したように広隆寺金堂が同規模であり、北白川廃寺でも同規模の東方基壇が金堂と推定できる。北野廃寺でも唯一確認されている礎石建物の基壇が低く講堂と推定されているが、回廊が取り付くことから金堂基壇である可能性も残されている。雪野寺も基壇構築がほとんど地山削りだしで行なわれていることから、金堂基壇をそれほど高く造っていなかったのかもしれない。

むしろ、主要交通路からの伽藍景観という側面から考えた場合、雪野山の山際に堂舎が斜めに建ち並ぶ景観が最も自然であろう。雪野寺の立地は、幹線路である奈良道と主要河川である日野川が交叉する交通の要所に位置している¹⁰⁰。西南から奈良道を下ってくると、雪野寺の堂舎が正面に並んで見えるであろうし、蒲生郡の中央部から日野川を下ってもその正面性は損なわれない。寺院景観としては南西からの視点を意識して造営したため、傾斜面を削っても主軸を合わせ、塔と金堂を建立したのであり、最も北西に位置する基壇建物だけが中軸を異にするのは、概要

畿内における在地寺院の様相（網 伸也）



第3図 雪野寺の伽藍



第4図 雪野寺・宮井廃寺の立地と宮井廃寺の伽藍

で推定されるように、より僧侶の空間に近い堂であるため地形に規制されるままに建立されたためと考えられる。このような在地寺院では複数の僧侶が常住していたとは考えられず、付属院地が明確に寺院地内に形成されることはなかったであろう。衣川廃寺で想定したように寺院地として一定の区切られた空間を持たない寺院では、在地勢力圏内に寺院経営に関わる施設が設けられ可能性が高いと考えられる²⁰。

さらに、雪野寺から日野川を溯った左岸平野部に建立されたのが、宮井廃寺である。昭和55年度から58年度まで4次にわたる発掘調査が行なわれ、瓦積基壇の金堂と乱石積基壇の塔・北方建物・西方建物の4棟の建物遺構を確認した²¹。これら基壇建物の構築法は、地山に類似した丁寧な盛り土だけで明瞭な版築技法は施されていないのが特徴的である。これは、雪野寺の基壇造成と共通する構造であり、在地寺院には版築技法によって基壇を構築しない例も多く存在することを示唆している。伽藍の建立順序については、金堂基壇内には瓦片の混入は認められないのに対し、他の基壇内からは瓦片や土器片の出土が認められることや、使用された軒瓦のセット関係に違いが認められることから、まず金堂を造営し次いで塔を順次建立していったことが推測できる。ここで確認できる伽藍配置も金堂の南西に塔を置く特異な伽藍配置であり、在地の特異性を示している(第4図)。

ただ、雪野寺などと様相を異にする点として、平野部に造営された寺院であるため付属院地の存在を示唆する方形区画の寺院地を指摘できることである。水田畦畔に認められる蒲生郡の条里痕跡は北に対して大きく西に振っているが、宮井廃寺の推定寺院地では南北の地割が認められる。発掘調査でも狭いトレンチ調査ながら、伽藍の南・北・西で溝を検出しており、8世紀の土器を中心とした遺物が出土している。また、西方基壇に関しては、基壇内に瓦片・焼土を包含することから金堂・塔などとは同時期に計画して建てられたとは考えられないと指摘されている。さらに、伽藍北に隣接した野瀬遺跡では、寺院地北限溝と推定される東西溝と付属院地内に設けられた井戸や掘立柱建物を検出している。特に、井戸は8世紀前半に構築され、改修を受けながら10世紀前半まで使用されており、寺院の厨房施設に付属する井戸と想定されている。奈良時代になって寺院経営施設が伽藍地の北に営まれ、継続的に平安時代まで機能していたのであろう²²。おそらく創建当初は、衣川廃寺や雪野寺と同じように金堂と塔の造営が主体的に行なわれ、定型化した伽藍配置は指向されていなかったものと推測できよう。しかし、条里地割の施行を契機として伽藍主軸を重視した寺院地の確保がなされ、西方建物や厨屋など寺院地内の諸施設が整えられていったものと考えられる。

このような奈良時代以降での寺院地の整備は、北山背の古代寺院でも推定してきたことであり、在地寺院における2つの存在形態をここに指摘できる。つまり、定型化した伽藍設計を持たず、主要幹線などからの景観を重視して仏堂と塔を造営していった在地寺院が、奈良時代における寺院統制のなかで寺院地を確保し、付属雑舎などの整備によって寺院経営を行なっていくものと、在地勢力圏のなかで総合的に寺院経営を行なっていくものである。ただ、この存在形態の差

異は、寺院の上下関係を示すものではなく、寺院の立地や遺跡として寺院の建立や経営に関わった在地勢力のあり方に規定されるものであることを忘れてはならないであろう。

4. 在地寺院の構造(2)

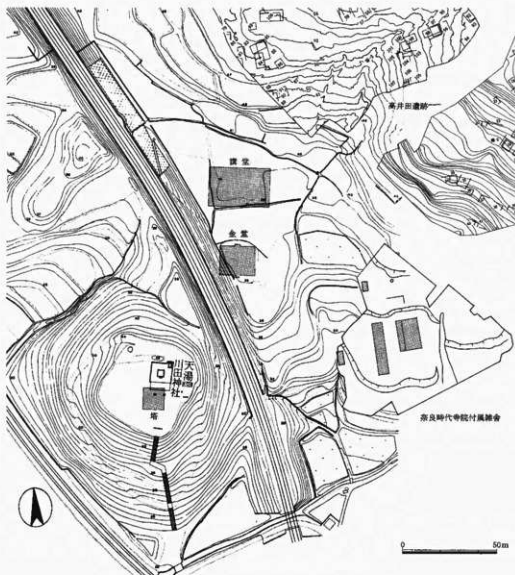
定型化した伽藍配置を持たない寺院は、北山背・近江で確認した諸寺院に限ったものでなく、畿内周辺部の在地寺院で多く認められるものであろう。その代表的な寺院が河内の高井田廃寺である。

生駒山脈の最南端、安堂山から西南に伸びる狭い丘陵に建立された古代寺院で、西は大和川と石川の合流点を望み、大和川の南岸には玉手山丘陵がせまる、まさに交通の要衝に立地している。昭和36・37年に発掘調査が行なわれ、金堂・講堂が南北に並び、西南の独立山塊上に塔を建立する伽藍であることが判明した⁹⁴。金堂基壇は大部分が地山削り出しで低い部分のみ盛り土で構築しており、基壇化粧の壇上積が良好に遺存していた。塔基壇は削平が激しく上部構造は明らかでないが、基壇周辺の板石溝と地下式心礎が残っていた。講堂基壇も後世の破壊をかなり受けていたが、礎石は非常によく残っており身舎内部では須弥壇の遺構も残っていた。

これらの伽藍であるが、創建期のⅠ型式軒瓦は金堂と塔付近でしか出土せず、対応する丸瓦・平瓦も同じ状況であることから、講堂に先だって金堂・塔の造営が行なわれたと推定できるが、大きな時期差は認められないとする。その時期は軒瓦の年代観から7世紀第3四半期ごろと推定できる。なお、この特異な伽藍配置について「寺院を丘陵上にたてこめ、地形の制約をうけた結果」として消極的に考えられているが、塔が立地する山塊上と金堂・講堂との間には5m近い高低差があり非常に眺望がきくことから、塔と金堂の占地についてはもっと積極的に捉える必要があろう。この寺院もやはり定型化した伽藍配置を指向したものではなく、景観を意識して塔の位置が決められ、金堂・講堂が建立されたと考えられるのである（第5図）。

さらに重要な点は、昭和58年・59年の発掘調査において、中心伽藍の尾根筋と谷を一つへだてた東の尾根上で付属雑舎の建物群が検出されたことである⁹⁵。この地域の造成は7世紀中頃から後半に行なわれ、食堂（あるいは厨屋）と僧坊らしき建物が建立されたとされる。また、「鳥坂寺」と記された墨書土器も出土し、従来の推定どおりこの寺院が鳥坂寺であることが判明した。これら建物群の造営年代は、平坦地造成の埋没谷から出土した土器群より7世紀末と考えられているが、出土瓦の中に多くの一枚作り縄叩き平瓦が含まれることから時期的に下がり、8世紀段階で寺院付属雑舎群が成立した可能性が高い⁹⁶。明確な区画施設は設けないが、自然地形を利用して奈良時代に付属雑舎域の整備が行なわれたのであろう。

そして、これに対応して高井田遺跡では、大型集落の急激な消滅という興味深い現象がおきていることに注目したい⁹⁷。高井田遺跡は、高井田廃寺伽藍の東から北にかけて近接する丘陵傾斜面に形成された集落で、6世紀末に成立し7世紀には総数86棟にもよる掘立柱建物が斜面を削



第5図 高井田廃寺の伽藍地および付属雑舎

りだした平地に建てられていた。建物は一辺が1m近い大型掘り方を伴う掘立柱建物であり、これらの建物群の造営のピークは7世紀中頃から後半にかけてであることから、報告では高井田廃寺の造営と密接に関わった氏族、鳥坂氏の集落である可能性が高いとしている。これらの集落が奈良時代に忽然と姿を消し、それと時期を合い前後して寺院の付属雑舎が整備される事実は、在地寺院の奈良時代における展開過程を考えるうえで重要な所見であろう。在地勢力の中心集落が眺望の優れた立地に営まれ、さらに在地支配の象徴ともいべき古代寺院が造営されたのであるが、奈良時代には寺院とともに威圧的な景観を保っていた在地氏族の集落が、寺院統制の流れの

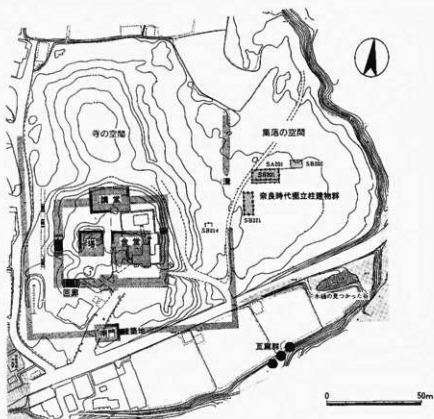
なかで消滅してゆき、寺院には経営施設である付属雑舎が整備されていったと推測される。

以上、在地寺院の構造を伽藍の造営を主体とする創建の時期と、その後の付属院地が整備されていく時期に焦点をあてて検討してきた。その結果、伽藍に関しては定型化した伽藍配置にこだわらない造営が、在地における古代寺院の一つの存在形態であると推定できる。これに対し、当然のことながら定型化した伽藍配置を設計段階で指向した在地寺院も多く存在する。南山背では久世庵寺や高麗寺などが法起寺式伽藍配置で建立されており、摂津では伊丹庵寺や猪名寺庵寺が法隆寺式伽藍配置をとり、回廊で区画された伽藍地や築地あるいは柵列で区画された寺院の存在が明らかになっている。これらの寺院のほとんどが塔と金堂を並列させる伽藍配置の範疇におさまる事実、伽藍配置の背景に景観という観点から仏教観を考へようとした山路直充氏の提言の有効性を示している⁹⁹。王権に連なる伽藍建物を現出することによって、在地支配を推し進めようとする有力氏族の姿を、これらの寺院の造営に見て取ることができる。

しかし、寺院造営は在地支配のモニュメントとしての性格とともに、在地における精神的支柱としての役割を担うものでもあった。それらは伽藍地内での仏教儀礼の行使によって満足されるものであり、そのような仏教儀礼を継続して行なうためには一定の経営基盤が必要とされるようになる。それが伽藍地の周辺に整備された付属雑舎を含む寺院地の確保であり、寺田などの実利をもたらす「寺地」の経営であったと考えられる。ここで定型化した伽藍配置を持つ古代寺院の事例として、海会寺について検討してみたい。

海会寺は京都市域の平野部、椋井川に新家川が合流する地点の西南約300m、新家川の左岸段丘上に位置する。伽藍を含めた関連遺跡は、東を段丘崖、北と南を開析谷、西を人工的な溝状低地に囲まれた独立丘陵上に立地しており、丘陵の西半に寺院が造営され、やや低くなった東半の平坦地に集落遺跡が形成される。伽藍は金堂を東に塔を西に配した法隆寺式伽藍配置で、吉備池庵寺や四天王寺と同範の山田寺式軒丸瓦を創建瓦とすることから、7世紀第3四半期には創建されたと考えられる。発掘調査の成果によると、丘陵の最も高い安定した地点に先ず金堂が建立され、まもなく西の傾斜面を盛り土で造成して塔の造営が行なわれたとされる。講堂は金堂・塔とは主軸が異なり北に対して西に大きく振れている。この振れは南門遺構と共通しており、講堂基壇下層から金堂・塔の造営時に操業したと考えられる瓦窯が検出されていることから、造営がやや遅れるものと考えられる。しかし、軒瓦の様相に大きな違いはなく、それほど大きな時期差はないようである⁹⁹。

これらの事実から、金堂と塔を並列させる伽藍を指向して順次建物が建立されていったと考えられるが、問題は回廊の造営時期である。回廊基壇下層からは藤原宮平行期と想定されている平瓦Ⅱ型式が出土しており、回廊の造営は主要伽藍よりもかなり遅れたことが予測できる。また、回廊に伴う軒瓦が確定できず、講堂への取り付けも明らかでない。回廊は伽藍地を区画する重要な施設であるが、創建当初は回廊で伽藍地を区画する意図がなかった可能性も残る。後述する伽藍地東の掘立柱建物群の整備に伴い、伽藍地の整備も行なわれたのではなかろうか。



第6図 海会寺の伽藍地と寺院地

このように、定型化した伽藍を持つと考えられる海会寺でも、我々が伽藍配置として確認できるのは最終的に伽藍整備がなされた段階のものであり、創建当初は景観を意識してまず金堂と塔を造営するという、いままで検討してきた在地寺院と同じ構成原理で造営が行なわれたと推定できる。金堂基壇と塔基壇の北端がずれている事実や、講堂規模が小さく主軸が異なっているのも、このような造営事情が反映しているであろう。そして、定型化した伽藍配置とともに伽藍地が意識されたために回廊の造営され、最終的に我々が確認するような法隆寺式伽藍配置となったと考えられる(第6図)。

では、海会寺において伽藍地が意識され、回廊の造営が行なわれた契機はどこにあるのであろうか。私見では、この問題を解明するヒントが伽藍の東で確認された掘立柱建物群の展開にあると考えている。この地域では寺院が造営される以前の7世紀初頭から掘立柱建物が建てられ始め、建物の方位や柱穴の切り合い関係、出土遺物の差異などによって第Ⅰ期から第Ⅱ期までの変遷が想定されている。このうち第Ⅵ期と第Ⅶ期の建物が非常に大型であり、官衙のように規則正しい建物配置をとることから、寺院の造営氏族の居館が営まれたと推測されている⁶⁰⁾。古代氏族の居館が施捨されて初期寺院が造営される例は『日本書紀』など文献資料で確認でき、実際に発

掘調査でも寺院下層で掘立柱建物が多く検出されており、在地の有力氏族がその居住地に寺院を建立した可能性が指摘されている⁴⁰。ただ、海会寺の発掘調査成果をみた場合、寺院造営前と考えられる第Ⅰ期から第Ⅳ期までの掘立柱建物は規模が小さく、伽藍地下層からも掘立柱建物が検出されていない。また、大型で規則正しい建物配置で造営される第Ⅵ期の建物は8世紀にはいつてからのものであり、寺院創建後に氏族居館が新たに造営されたことになる。この地域は東側が段丘崖面となっており、空間的にも有力氏族の居館としては狭すぎるのではなかろうか。

推定では伽藍地の北側に寺院付属雑舎の空間を想定しているが、私は海会寺の寺院地としては方形の区画を持つのではなく、自然地形に規制されるかたちでこの独立丘陵全体を寺院地として占有していたと考えている。伽藍の北側にもある程度の施設の存在は想定できるが、寺院付属院地としては奈良時代になって東半の空間が整備され、第Ⅵ期あるいは第Ⅶ期建物群が営まれたと考えるほうが、空間利用としても自然であろう。そして、これらの付属院地の整備とともに伽藍地の整備（回廊の造営など）が行なわれ、寺院としての体裁を整えたと考えている。

高井田廃寺あるいはその他の事例で確認してきたように、8世紀になると在地寺院が伽藍の造営だけでなく、付属雑舎の整備を行なう傾向が強くなる。これは奈良時代における仏教統制政策と密接に関わっているものであり、ある意味では在地勢力からの寺院経営の独立を目指したものと見える。発掘調査で明らかになりつつある在地寺院の存在形態も、これらの歴史的背景を視野に置いて再検討する必要がある。

5. おわりに

7世紀に創建が求められる在地寺院は、発掘調査によって伽藍の堂舎が明らかになっても、それが定型化した伽藍配置として捉えられない事例が多くある。畿内周辺部だけでなく畿外になれば、その傾向は強くなると予想できよう。寺院の一連の造営過程の中には、基壇を造成し礎石を据えて建物の土台を強固にする、礎石上に柱を建てて上部構造を複雑に組み上げる、瓦を焼成し生産地から運び込んで屋根に葺き上げる、といった在地ではいままでなかった新しい建築技術が駆使され、金色に輝く「仏」という新しい神を堂内に荘厳するために、金工や木彫・絵画などの様々な技術が導入される。当然、寺院造営は仏教に対するある程度の教義的理解がなければ実現しないが、在地における寺院造営とは、新しい時代の象徴的な事象であった。このため、定型化した伽藍配置を目指すよりも、在地ではまず仏堂（あるいは塔）を荘厳に建立することが重要だったのであり、最も景観のよい場所を寺と定めて伽藍を造営していったのがその実態といえる⁴¹。

しかし律令国家体制の在地への浸透とともに、寺院を建立氏族（権越）の私的な専利経営から切り離し、僧尼供養を安定させることが問題となる⁴²。このような時勢に対して、畿内周辺部の古代寺院の経営基盤が奈良時代に变化する様相が観察できるようになる。これは寺地が施入され

寺院地の成立が認められるようになることと、まさに対応する現象といえよう。そしてこれらの歴史的背景として、霊龜2年(716)の寺院併合令をはじめとする8世紀前半の寺院統制政策があったことは疑いないであろう。北山背の古代寺院も8世紀にはいって条里に基づく寺院地の成立が認められるし、他地域の在地寺院でも奈良時代における付属院地の整備が発掘調査で明らかになりつつある。ただ、すべての在地寺院が、地域共同体を代表する氏族から経営的に独立していく基盤をもてるわけではなく、ほとんどの古代寺院が平安時代には衰退・廃絶している。これは古代寺院が氏寺としての枠組みから抜け出すことができず、結局経営を支えていた氏族が律令体制の崩壊とともに没落していくのと軌を一にしていると考えられるのである。

この指摘では、在地寺院の伽藍がどのように造営されていくのか、そして寺院としての性格が奈良時代において変化していく様相を、考古学的事例に基づいて検証しようと試みたものである。その結果、在地寺院は定型化した伽藍配置にこだわらず、あくまで立地・景観に規制されるかたちで伽藍造営が行なわれていく様子を明らかにするとともに、奈良時代において寺院地(独立経営の基盤となる付属雑舎)の整備が認められることを予見できた。しかし、在地の歴史的事情は多種多様であり、一元的に捉えられるものではなく、在地寺院の建立過程も一律に解釈すべきものでもない。また、推論に推論を重ねたために多くの誤謬を犯していることと思う。寛容なるご叱正ご批判をいただくとともに、ここでの観察が在地寺院の歴史的な解明を行なううえでの糸口となれば幸いと考える次第である。

なお、この小論は1997年8月30日・31日に香芝市二上山博物館で開催された第42回埋蔵文化財研究集会(テーマ「古代寺院の出現とその背景」)での発表内容に基づき、検討領域を広げて新たに考察を加えたものである。2日間にわたって行なわれた研究会あるいはその準備会の席上で、関係者をはじめとする多くの方々にご教示を得た。また、大脇謙・小笠原好彦・坪之内徹・森郁夫の諸先生方から有益な御助言をいただいた。ここに感謝の意を表したい。

註

- (1) 太田博太郎「南都六宗寺院の建築構成」『日本古寺美術全集』第2巻、集英社、1979年
- (2) 上原真人「仏教」『岩波講座 日本考古学』4、岩波書店、1986年
- (3) 山岸常人「発掘寺院の建築」『季刊考古学』第34号、雄山閣出版、1991年
- (4) 須田勉「千葉県古代寺院跡発掘の現状」『歴史手帖』第10巻10号、名著出版、1982年
- (5) たとえば上総国分尼寺では、伽藍地の北方に政所院や修理院などの付属施設が存在し、寺院地は溝によって区画されていたことが発掘調査によって明らかになっている。
宮本敬一「最近の調査成果から見た上総国分尼寺の伽藍と付属諸院」『月刊歴史教育』第30～33号、東京法令出版、1981年
- (6) 山路直充「寺院地という用語」『下総国分寺跡——平成元～五年度発掘調査報告——』市立市川考古博物館研究調査報告第6冊、市立市川考古博物館、1994年
須田勉「国分寺の創建」『聖武天皇と国分寺 在地から見た関東国分寺の造営』、雄山閣出版、1998年
- (7) 大脇謙「古代寺院と寺辺の景観を復原する——その研究史と問題の所在——」『摂河泉の古代寺院とそ

の周辺」第1回摂河泉古代寺院フォーラム資料、摂河泉文庫、1997年

- (8) 網伸也「広隆寺創建問題に関する考古学的私見」『古代探叢』IV、早稲田大学出版会、1995年

- (9) 鈴木久男「第10次発掘調査」『北野廃寺発掘調査概報 昭和61年度』、京都市文化観光局・（財）京都市埋蔵文化財研究所、1987年

網伸也・南孝雄「北野廃寺跡第15次調査」『京都市内遺跡発掘調査概報 平成8年度』、（財）京都市埋蔵文化財研究所、1997年

- (10) 浪貝綾「北野廃寺と広隆寺旧境内」『仏教芸術』116号、毎日新聞社、1977年

- (11) 網伸也「広隆寺創建問題に関する考古学的私見」（前掲）

- (12) 近藤喬一「太秦広隆寺の調査」『古代文化』第22巻3号、（財）古代学協会、1970年

- (13) 上村和直「広隆寺旧境内2」『京都嵯峨野の遺跡——広域立会調査による遺跡調査報告——』、（財）京都市埋蔵文化財研究所、1997年

- (14) ここで示した北白川廃寺の伽藍復原案や、次に述べる寺院地の推定については以下の拙稿でまとめている。

網伸也「北白川廃寺の伽藍復原——最近の発掘調査成果による——」『平安京歴史研究』、真陽社、1993年

- (15) 長戸満男「小倉町別当町遺跡」『平成6年度京都市埋蔵文化財調査概要』、（財）京都市埋蔵文化財研究所、1996年

- (16) 大宅廃寺の発掘調査成果については、以下の拙稿で整理し私見を述べているので参照されたい。

網伸也「大宅廃寺再考」『瓦衣千年 森郁夫先生還暦記念論文集』、真陽社、1999年

- (17) 平方幸雄・菅田薫「大宅廃寺」『昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要』、（財）京都市埋蔵文化財研究所、1988年

- (18) 佐藤英治「標原廃寺発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報（1967）』、京都府教育委員会、1967年
杉山信三・佐藤英治「標原廃寺跡の発掘調査概要」『仏教芸術』66号、毎日新聞社、1967年

- (19) 久世康博「標原廃寺跡第4次調査」『京都市内遺跡発掘調査概報 平成9年度』、（財）京都市埋蔵文化財研究所、1998年

- (20) 久世康博「標原廃寺跡第4次調査」（前掲）

- (21) なお、（財）京都市埋蔵文化財研究所では現在標原廃寺の報告書作成を進めている。調査・報告書作成を担当している久世康博氏のご教示によれば、現段階では伽藍北で検出した2列の東西掘立柱列を北回廊と解釈することには疑問点が多く、やはり伽藍の北を区切る何らかの閉鎖施設と考えているとのことである。

- (22) 上原真人「仏教」（前掲）

- (23) 山路直光「関東地方の伽藍配置——8世紀以前について——」『シンポジウム古代寺院の伽藍配置』、帝塚山大学考古学研究所、1999年

- (24) 丸山竜平・藤澤一夫「衣川廃寺発掘調査報告」、滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会、1975年

- (25) 青山均・栗本政志・福田敬・吉水真彦「史跡衣川廃寺跡整備事業報告書」『大津市埋蔵文化財調査報告書（30）』、大津市教育委員会、2000年

なお、衣川廃寺の発掘時の状況については、福田敬氏に多くのご教示を得た。

- (26) 青山均ほか「史跡衣川廃寺跡整備事業報告書」（前掲）

- (27) 吉水真彦「衣川遺跡発掘調査」『びわ湖と埋蔵文化財』、水資源開発公団琵琶湖開発事業建設部、1984年

- (28) 柏倉亮吉「雪野寺証発掘調査報告」『日本古文化研究所報告第7』、日本古文化研究所、1937年

- 29 岡村秀典・菱田哲郎・高橋克壽「滋賀県雪野寺跡発掘調査の概要」「聖像出土古代寺院の総合的研究」、京都大学文学部考古学研究室、1992年
- 30 丸山竜平「日野川中流域の白鳳期寺院と古墳」「聖像出土古代寺院の総合的研究」（前掲）
- 31 具体的には建立氏族の居館内やその周辺に僧侶（僧形者）が居住し、仏教儀礼を行なう時に随時伽藍内に赴いていたというのが、創建当初における在地寺院の実態であったと推測している。
- 32 小笠原好彦・北川浩ほか「宮井廃寺跡」、蒲生町教育委員会・滋賀大学考古学ゼミナール、1985年
- 33 ただ、宮井廃寺は堂塔が9世紀前半に焼失しており、野瀬遺跡でもこの時期に一旦遺構の廃絶が認められる。再建後の伽藍は北方建物を中心とした簡素なものであり、むしろ野瀬遺跡で「造佛」「西一方」「東一方」など寺院に關係の深い平安時代中頃の墨書土器が、多くの掘立柱建物とともに検出されていることから、平安時代の宮井廃寺は創建段階の伽藍寺院とは様相がかなり異なっていたと推測できる。
- 北川浩「野瀬遺跡」『はま整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅰ』、蒲生町教育委員会、1989年
- 34 浅野清・河原純之・藤澤一夫・山本昭「河内高井田・鳥坂寺跡」大阪府文化財調査報告書第19輯、大阪府教育委員会、1968年
- 35 花田勝広・田中久雄「鳥坂寺——寺域の調査——」、柏原市古文研究会、1986年
- 36 安村俊史「鳥坂寺僧坊跡周辺出土土瓦の再整理」「平尾山古墳群1999年度」柏原市文化財概報1999-Ⅱ、柏原市教育委員会、2000年
- 37 安村俊史ほか「高井田遺跡Ⅰ——区画整理事業・河川改修事に伴う——」柏原市文化財概報1985-VI、柏原市教育委員会、1986年
- 安村俊史「高井田遺跡Ⅱ——高井田地区区画整理事業に伴う——」柏原市文化財概報1986-VI、柏原市教育委員会、1987年
- 安村俊史ほか「高井田遺跡Ⅲ——国民年金健康保養センター建設に伴う——」柏原市文化財概報1988-IV、柏原市教育委員会、1989年
- 38 山路直充氏は註33文献において、「この配置（法隆寺式伽藍配置）が百濟大寺で採用されたとするならば、堂塔の大きさと相まって偉観という視覚的効果が期待できると思う。仏教の受容と発展については諸説あるが、仏教が王権統治の方便として利用されたことは事実である。その装置として寺を捉えるならば景観という観点は無視できない。」と、景観論からみた伽藍配置について明確に述べている。
- 39 広瀬和雄・飯屋喜一郎ほか「海会寺遺跡発掘調査報告書」、泉南市教育委員会、1987年
- 40 広瀬和雄・飯屋喜一郎ほか「海会寺遺跡発掘調査報告書」（前掲）
- 『海会寺跡発掘調査現地説明会資料Ⅳ』、泉南市教育委員会、1993年
- 41 小笠原好彦「古代寺院に先行する掘立柱建物集落」『考古学研究』第28巻第3号、1981年
- 42 金堂一堂が創建期の伽藍の中心であり、後に塔や講堂が建立され伽藍が整備される事例としては、畿内大和から東国へ抜ける交通の要衝に建立された夏見廃寺がよく知られている。夏見廃寺は多くの飯仏で荘厳された金堂が7世紀末に建立されるが、創建当初は金堂の他は伽藍を画する横列と少数の掘立柱建物で構成されている。そして、奈良時代半ばに金堂の東に塔が、南西に講堂が建立され、結果的に変則的な法起寺式伽藍配置をとることが明らかになった。ここでも、奈良時代における伽藍整備が認められる。
- 水口昌也「夏見廃寺」、名張市教育委員会、1988年
- 43 舟ヶ崎正孝「試業得度・公験制と民間僧尼」『国家仏教受容過程の研究』、雄山閣出版、1985年（論文初出は『歴史研究』第18号、1981年）

図版出典（一部加筆）

- 第1図：北野廃寺 網伸也・南孝雄「北野廃寺跡第15次調査」（註9）文献）

畿内における在地寺院の様相（網 伸也）

北白川廃寺 網伸也「北白川廃寺の伽藍復原」（註34文献）

大宅廃寺 網伸也「大宅廃寺再考」（註36文献）

櫻原廃寺 久世康博「櫻原廃寺跡第4次調査」（註39文献）

第2図：丸山竜平・藤澤一夫「衣川廃寺発掘調査報告」（註34文献）

青山均ほか「史跡衣川廃寺跡整備事業報告書」（註29文献）より作成

第3図：岡村秀典・菱田哲郎・高橋克壽「滋賀県雪野寺跡発掘調査の概要」（註29文献）

第4図：小笠原好彦・北川浩ほか「宮井廃寺跡」（註33文献）

岡村秀典・菱田哲郎・高橋克壽「滋賀県雪野寺跡発掘調査の概要」（註29文献）

第5図：浅野清・河原純之・藤澤一夫・山本昭「河内高井田・鳥坂寺跡」（註34文献）

花田勝広・田中久雄「鳥坂寺——寺域の調査——」（註35文献）

安村俊史「高井田遺跡Ⅱ」（註37文献）

安村俊史ほか「高井田遺跡Ⅲ」（註37文献）より合成して作成

第6図：第42回埋蔵文化財研究集會資料「古代寺院の出現とその背景」第2分冊

（財団法人京都市埋蔵文化財研究所・大阪府高槻市宮之川原元町31-10）